ふるさと上越ネットワーク会報

NO.16 2003.11

巻頭言

Jネット副会長　松川太賀雄（稲田出身）

今年は江戸開府四百年に当り、東京では色々なイベントが計画されています。家康が天下統一してから今日まで、日本は驚異的な変化を経験しました。その中で、我が上越の歴史も多くの変遷を経て、今の上越市となって三十数年です。あと十回余り歴史を繰り返す中で、どの様に変って行くのか興味深いところです。

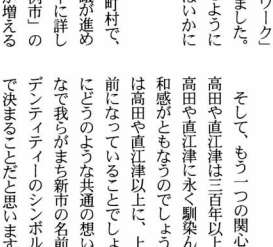
さて、私たちの「ふるさと上越ネットワーク」（Jネット）は発足して既に七年目になりました。Jネットの名称や活動は徐々に知られるようになっていますが、果たして見かけと実態はいかにと自問しているこの頃です。

上越地域では今、上越市を中心に十四市町村で、平成十七年一月一日の合併を目指して協議が進められています。この合併については本文中に詳しく記載されていますが、合併すると「特例市」の要件を満たし、市が独自で図る行政機能が増えることになります。そして、新しい市の実現に向って、新しいマネージメント感覚で新時代にふさわしいビジョンや計画が示されるでしょう。そこで必要なのは、美辞麗句が並んだ目標や指標数字だけではなく、まちづくりの方向が肌で感じられるような実施計画書だと思います。この計画書の内容には大いに期待するところです。

そして、もう一つの関心事は、新市の名称です。高田や直江津は三百年以上も使われ、「上越市」は高田や直江津に永く馴染んだ人々にとってまだ違和感がともなうのでしょうが、今の若者にとっては高田や直江津以上に、上越はこだわりのある名前になっていることでしょう。これから新しい市にどうのような共通の想い託すか、そして、みんなで我らがまち新市の名前を、誇り高く育てアイデンティティーのシンボルとすることが出来るかで決まることだと思います。

私たちが上越を出てから数十年になり、今は大きく変わり帰郷することに懐かしさを募らせます。しかし、今の若者にとって、今の景観と行事や生活習慣は、二十～三十年後には原風景になります。ですから、これから新しく創る公共物や民間の建造物など、そして、市の制度や催事などすべてに言えることです。それがスタートの時はたとえ荒削りであっても、歳月に耐え時間の経過と共に磨かれ馴染みとなるものを、若者への贈り物にしたいものです。

Jネットは、ふるさと上越の応援団です。ふるさと上越を誇りにできることは私たちの喜びです。これからも上越の発展を願って、全国に居られる会員の皆様から、それぞれ各地から上越を見て気付いた貴重な意見やアイデアを、今までにも増して積極的に提案して行こうではありませんか。



市長挨拶

上越市長　木浦正幸

全国のふるさと上越ネットワーク（Jネット）の会員の皆さん、こんにちは。

Jネットは、上越市（旧高田市、直江津市）の出身者や何らかの縁があって上越市に「ふるさと」を感じている方たちの上越市の振興、発展を応援していただいている集まりで、会の発足から七年になりますが、日頃からご声援、ご支援をいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

今年は、私もふるさと交流会として実施した春の観桜会に参加させていただき、また、五月の東京での総会にも出席させていただき、親しく参加会員の皆さまとお話させていただきました。そこで、皆さんのふるさとの想いの深さと期待の大きさを改めて実感いたしました。そして、この応援団が全国で約九〇〇名もいらっしゃることをとても心強く感じた次第です。

さて、ふるさとでの大きな動きとして、市町村合併がございます。既に日常生活圏として一体化し、経済活動においても互いに支えあっている地域が、それぞれの潜在力を結集し、産業振興や人材育成を図ることで地域の力を一層高め、地域全体で持続的に発展していく取組みを進めることが必要であると考えております。そして、先の市議会臨時会において、まちづくりの理念を共有する十四市町村による「上越地域合併協議会」の設置についての議決をいただき、上越地域の新たな発展を願い、新しいまちづくりに向けて大きな一歩を踏み出したところです。

平成十七年一月一日には、新しい上越市が誕生しますが、Jネット会員の皆さまのふるさと上越への熱い想いを受け止め、また、皆さまをいつでもあたたかくお迎えできる持続的発展をしていく地域を作り上げてまいりたいと考えております。今後とも、応援をよろしくお願いいたします。

Jネットで取り組んでいただいた、桜のオーナー事業の桜は、着実に上越の地に根付いております。また、高田公園の蓮の花が、全国各地で咲く日も近いことでしょう。皆さまとのつながりを大切にしていくことをお誓いするとともに、Jネットのますますのご発展をお祈り申し上げます。

美味しい上越の農産物を…

上越市農林水産課長　野口和広（子安在住）

高田公園の木々も色づきはじめ、上越市はすっかり秋色に染まっています。Jネット会員の皆さま、はじめまして農林水産課の野口です。

今年の夏は、低温と日照不足で全くといっていいほど夏らしい日がありませんでした。テレビや新聞では、冷夏による北海道や東北地方での米の不作の報道がされ、美味しい上越の米の作柄が気がかりのことでしょうが、ご安心ください。上越の米は大丈夫です。収穫量は若干少なくはなりましたが、品質は昨年以上の出来になっています。

これは昨年から稲の登熟期が真夏の高温による障害を受けないようにするため、これまでの五月の連休中の田植を、一週間から十日ほど遅らせる取り組みを全農家が徹底しているからです。このような農家の方々の不断の努力の賜物であり、上越市農業の底力であります。

安全で安心な農業生産を基本にしている上越のお米は市場から高い評価を受けており、順調に売れています。これからも、安全で安心な売れる米づくりを進めていきます。

さて、現在、周辺町村との合併に向けて準備をすすめているところですが、合併を予定している町村のそのほとんどが中山間地域です。ご存知のとおり中山間地域では、高齢化と過疎化が進み農業後継者不足が深刻化しており、地域農業の継続が危ぶまれています。

その中山間地域の活性化には、豊かな自然と地域の特性を有効に活用し、都市住民との交流を促すことが重要です。このことは、農業を基調とした体験型イベントや伝統行事・技能を活かした交流事業などを行い、中山間地域の魅力を積極的にPRして、多くの都市住民の方々から訪れていただけるように、地域ぐるみで取組まなければならないと考えています。

そこで、今年、Jネット会員の皆さまから参加いただき、桑取谷の棚田を利用して五月の田植え、十月の稲刈り・はさがけを体験する「楽しい農業体験」を実施しました。

豊かな自然と美しい風景の中で汗を流された体験と、有機・減農薬で栽培し、はさ木による天日干しされたお米のお味はいかがでしたでしょうか？

来年度も、さらに内容を充実させ魅力ある体験型イベントをはじめとする交流・体験プログラムを用意して皆さまのお越しをお待ちします。

また、中山間地域の特産品開発として、北陸研究センター（旧北陸農試）が開発した、ルチンを多く含むそばの新品種「とよむすめ」の栽培実証にも取り組み、いずれ名物にしていきたいと考えています。

日本の農業を取り巻く環境は依然として厳しい状況にありますが、これからも上越市農業の振興に努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

市町村合併をめぐる上越市の状況

上越市企画部合併推進課

高田公園の木々も色づきはじめ、平成十七年一月一日を目途として、十四市町村の合併への動きが進んでいますが、今回、Jネット会員のみなさんには、この合併に向けての上越市の状況をお知らせします。

◆第一回上越地域合併協議会の開催

去る八月二十日、十四市町村（上越市、安塚町、浦川原村、大島村、牧村、柿崎町、大潟町、頸城村、吉川町、中郷村、板倉町、清里村、三和村、名立町）により、上越地域合併協議会が設置されました。この協議会は、地方自治法と市町村の合併の特例に関する法律に基づき、それぞれの市町村の議決を経て設置された「法定合併協議会」で、合併協議の最終ステージとなるものです。引き続いて十月七日には、第一回上越地域合併協議会が開催され、市町村を代表する委員の皆さんが顔を揃え、合併に向けた正式な協議がいよいよスタートいたしました。

協議会の会長である木浦上越市長は冒頭のあいさつの中で、協議に臨むに当たって、「これまでのように調整役に徹するのではなく、上越市民を代表する上越市長という、会長とはまた別の立場からも発言していきたい。」と、上越市が、周辺十三町村を編入する責任ある立場であることを表わす固い決意を語りました。

◆合併の意義

皆さんの出身地である上越地域が、将来にわたって持続的に発展し、地域力をより強固なものにしていくためには、市町村合併により地域が一体となって『自主自立』に基づく新しい仕組みづくりに取り組んでゆくことが必要であり、厳しい時代を想定し、今から体質の改善、強化を図っていくのが二十一世紀型の合併と考えます。規模の拡大による効果を最大限活かし、行政コストの削減を図ることに加え、一層の行財政改革を進めることにより、時代の大きな波を乗り越え、最終的に市町村合併を市民の幸せの創造につなげて行くことが肝要です。

◆市民意向調査

上越市ではこれまでの間、三回にわたり、延べ五十七会場で市民説明会を開催し、合併の必要性等を市民に説明してきたほか、「市町村に関する市民意向調査」も実施し、市民の意向把握にも努めてきました。

今年の七月に実施した市民意向調査では、回答者の二十四・八％の皆さんが「十四市町村による合併に賛成する」と回答しています。さらに、「合併の必要性は認めるので、十四市町村による合併もやむを得ない」との回答の三十五・三％と合わせますと、十四市町村の合併を容認する意見は六十％に達する結果となりました。

また、十四市町村で「法定合併協議会」を設置し、合併について最終的な協議を行うことについては、「合併に向けて協議を進めてよい」との回答が六十六・六％と最も多い結果となりました。さらに新市の名称の調査項目については、「上越市の名称のままがよい。」が五十％、「合併を契機に新しい名前に変えるほうがよい」が十七・九％となっています。また、「変更するかどうかについて様々な観点から慎重に検討して行くべき」が二十二％となっています。

◆合併後の姿

現在、十四の自治体による法定合併協議会の設置は、全国でもいちばん、数の多いこととなりますが、別表に示した上越地域協議会構成市町村の主要指標でも

ご覧いただけますように、合併後は人口が現在の十三万五千人から、一・六倍の二十一万二千人となります。これにより、人口二十万人以上の都市が対象となる「特例市」の要件を満たすこととなり、行政機能の一層の充実が図られることが可能になります。また、財政規模を表す一つの指標である歳入総額が五百二十九億円から一・九倍の千四億円に拡大することになります。その他、面積では二百四十九平方キロメートルから三・九倍の九百七十三平方キロメートルにと、全国的にも大変大きな面積を有する市となります。

上越地域合併協議会構成市町村の主要指標

市町村名	人口 人	世帯数 世帯	面積 km²	歳入総額 千円	歳出総額 千円	議員定数 人	全職員数 人
上越市	134,751	45,891	249.24	52,927,310	51,689,556	30	1,152
安塚町	3,733	1,230	70.23	3,954,720	3,842,023	16	82
浦川原村	4,202	1,193	50.64	3,236,705	3,037,626	16	91
大島村	2,480	749	71.64	2,754,796	2,660,315	12	71
牧村	2,991	927	61.35	2,634,986	2,547,798	14	93
柿崎町	12,116	3,576	85.39	4,762,258	4,625,311	20	164
大潟町	10,861	3,097	16.32	3,938,514	3,680,686	18	130
頸城村	9,538	2,572	38.30	4,190,416	3,906,133	18	131
吉川町	5,516	1,507	76.61	4,417,449	3,782,163	16	110
中郷村	5,259	1,491	43.55	3,091,567	3,044,959	14	88
板倉町	7,534	2,029	66.51	4,955,856	4,692,142	18	122
清里村	3,217	830	37.54	2,908,546	2,633,128	14	68
三和村	6,284	1,628	39.36	4,359,083	4,098,137	18	100
名立町	3,388	934	65.94	3,313,336	3,203,671	14	69
合計	211,870	67,654	972.62	101,445,542	97,443,648	238	2,471

（出所）・新潟県総合政策部市町村課「新潟県市町村要覧＜平成14年度版＞」
〔人口、世帯数：「平成12年国勢調査」、面積：「平成13年度全国都道府県市区町村別面積調」
職員数：「平成14年定員管理調査」
・平成14年度新潟県決算統計より歳入、歳出総額〕

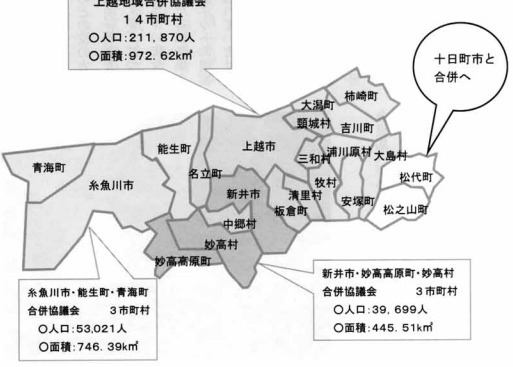
◆より良い合併に向けて

今後の合併協議会における決定事項は、合併協定書や新市建設計画という形で明らかになり、さらにここの内容が新市での行政サービスや基盤整備のための事業実施につながって行くことになります。

具体的には、これからの農業はどうなるのか、商工業は、観光は…など解決していかねばならない課題が山積みですが、ふるさとと応援団としてのJネットの皆さんのお知恵やお力をお借りする機会も出てくると存じます。その時はよろしくご協力ください。

上越市としては、現在の財政状況が大変厳しいことを踏まえながら、新市建設に向けた事業の検討と協議を十分に行い、この合併が、今後の上越地域の発展と市民の幸せ創造に向け、また、Jネットの会員の皆さまをいつでもお迎えできる、また皆様の心のよりどころとなる「ふるさと」を目指し、努力して行きたいと考えていますので、今後ともご支援をお願い申し上げます。

「上越地域の合併の状況」



感ずるままに

岩関順雄（西城町一丁目在住）

「おまんも来てみないかね」と誘われて、上越に住んでいるのですが観桜会などJネットのふるさと交流会に、これまでにも何回か参加させていただいています。

そして今回は、十月五～六日の「くわどり湯つたり村」での稲刈り体験ツアーに参加しました。稲刈り前夜の懇親会では、私が上越で剣道を一緒にやっている重野さんのお姉さん（中村さん）も参加されており、はじめてお会いする偶然もありました。

お米は中が暑く、夜は涼しく水の清いところで収穫したものが美味しいとされています。今回、田植えから稲刈りの体験に提供された棚田は海抜一〇〇メートルの所にあり、有機減農薬栽培で、その上、はさかけの天日乾燥ですから安全・安心、まちがいなく美味しいことでしょう。これからもっと、参加される方がどんどん増えれば荒地になる一方の棚田も、米を作るというばかりでなく景観の保存、治山・治水等の役目を果たすことができます。

今ではすっかり有名になった謙信公の「義の塩」の仕掛け人は、Jネットの方々だと言うことを上越市民のどの位の方が知っているでしょうか。八月にNHK・BS2で放送された「おーい、にっぽんー とことん新潟県」は見ていませんが、地元JCVで放送された谷浜特集でも「義の塩」についてはJネットの提案で始まったということに触れていませんでした。

Jネットは上越に縁のある方々が、お互いの親睦を図ることと合わせて、熱い想いで「ふるさと上越」の発展を応援することを目的としているそうです。一部関わりのある上越市民しかJネットのことを知らないのではないでしょうか。Jネットの存在や活動をもっともっと広報する必要があります。

私は里親会員になっています。友人・知己数人に上越市の情報（広報誌など）や、年末には「ふるさとカレンダー」が私の名前で送られて行き喜ばれています。私と同じように里親になっている会員はごく少数ではないかと想像できます。

Jネットの目的を果たすには会員数が多いことが大切でしょう。私共、上越に住んでいるものも大いに頼りにしています。そのためには是非とも、地元住民の会員加入が必要なのではないでしょうか。幸い賛助会員にマスコミの方が居られます。Jネットの存在をもっとPRされたらどうでしょうか。

ふるさと上越ネットワークの更なるご発展、会員の皆様のご健勝とご活躍を祈念いたします。

Jネットの皆様こんにちは

渡辺明美（上越市五智在住）

私は今、上越市議会で、文教経済常任委員長を務めさせていただいております。Jネット会員の皆様のご活動ぶりは、当市議会の委員会の中で度々市サイドから紹介されておりますので、皆様のふるさと上越（高田・直江津）に対する熱い想いに触れ、いつも大変嬉しく思っております。

私は、直江津は五智の海岸近くで生まれ、今も生家で暮らしております。♪生まれて潮に湯浴みして～波を子守りの歌と聞き～♪を地でいっております。子どもの頃といえば、夏は五智の浜で泳ぎ、春秋は五智の山を駆け回り、夕方になるとお寺の鐘の音が聞こえるのを合図に、歌を歌いながら家路を急ぐのを日課としておりました。夏の青々とした田んぼや秋のハサ木に稲がどっさりと掛かっている様子などなど…私の心の原風景として焼きついております。

Jネット会員の皆様の、心の中にある「ふるさと上越」の原風景はどんなものでしょうか？　現在はすっかり街の様子も変わりましたが、変わっていくのも又、脈々と息づくふるさとの姿として、原風景ともども愛していただきたいなと思っています。

今年は天候不順でお米の出来は、やや不作ということですが、それでもやっぱりおいしいお米が取れました。新米に自然薯のとろろ汁は最高です。Jネット会員の方の提案とご協力でスタートしました謙信公の「義の塩」は、関係者のご協力で今年の夏も塩づくりをして順調に定着しつつあります。その塩を使ったお味噌や地元産大豆のおしょう油「あぜみち」も大変好評です。もう、お味見をしていただけましたでしょうか？　まだの方はJネットを通じてぜひお試しください。きっとふるさとの味で食卓が賑わう事、請け合いです。

いまは、高田公園の桜が紅葉し、お花見の季節とは違った空気が公園全体を包んでいます。これからも観桜会や上越まつり、冬のレルヒ祭などのイベントのみならず、お気軽に足を運んでいただきたいと願っております。人材は何にも勝る財産です。今後とも生まれてよかった上越、住んでてよかった上越、と思っていただけるよう、市民としてがんばりますので、Jネット会員の皆様方のお知恵とご協力をこれからも宜しくお願い致します。

末筆となりましたが、Jネット会員の皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

楽しい農業体験

出会いの一時、永遠の宝に

千葉市花見川区　中村弘子（板倉村戸狩出身）

十月六、七日J-ネットの農業体験、くわどり湯つたり村での「稲刈とはさがけ体験」に参加しました。会員でいらっしゃる澤様のお誘いで重い腰を上げたという感じでしたが、だんだんその気になって来て、すっかりはまってしまいました。子供の頃（五十年近くも前ですが）「稲刈り休み」があって毎日毎日働いた記憶もなつかしく思い出されましたが、はたして自分の手で刈れるのだろうかと不安でした。

田圃提供して下さった曽我様が弓形になったのこぎり鎌で「サクッ・サクッ・サクッ・サクッ」と指導をして下さる音を聞いて、体の中に眠っていた何かが目をさましたような気がして来ました。ようし、まかせておいて!!昔とった杵柄だもの、と「サクッザクッ」あれえ～、ザク、ザク、あとは御想像下さい。でも最後のほうは、リズム感も良く、気持ち良く前進することが出来ました。

黄金色の穂波の田圃は二時間ぐらいで刈り取られ昼食をはさんで、次は「はさ」がけです。八段位の高さに作って下さった「はさ」に六・四位に分けられた稲束がどんどんかけられていく様は、収穫の喜びを感じられる瞬間です。腰の痛いのも暑いのも忘れて、気持ちの良い汗を流すことが出来ました。昼食の零余子入りおにぎりと、なつかしい「のっぺ」、「ずいき」の酢の物、初めての高原あざみの煮びたし等山菜のおかずは終生忘れることの出来ない味になりました。私のメニューのレパートリーも一つ増えて、これからは山菜中心のダイエットをとり入れていこうと考えています。何しろ美（医）食同源がさけばれて久しくなりますが、くわどりゆったり村旅館の「神無月会席」にみる山菜の見事なお味は、故郷自慢の目玉にしてもよいのではないでしょうか。薄味の中にそれぞれの山菜がそれぞれの味でしっかりと自己主張していて、なおかつヘルシーで美しい。おはずかしいのですが最近は外国へ行っても、何をいただいても、あまり感動しなくなっていたので、とてもうれしい発見でした。又、初日に旅館に着く前に幸い少し時間があったので、J-ネット事務局の関川様に春日山城跡周辺を案内していただきました。小学校時代何回も遠足で訪れた所ですが、今回の感動はその頃のものとは全く違っていて、歴史的意義と、自然の宝庫としての豊かな表情にふれ、大地と森林からのエネルギーを確かな感覚でもらうことが出来ました。

この度の経験を通して、生きる意味の原点と出会いが与えてくれる感動の喜びとで魂の奥深いところまで気持ち良くあたたかくなってきました。友人を誘って又必ず訪れたいと思っています。お世話をして下さった農林水産課の皆々様、本当に有難うございました。

稲刈りの　永遠に続かむ　この文化

はさがけや　黄金の中の　友の顔

稲刈りや　昔なつかし　かまの音

楽しい農業体験

はさがけで悪戦苦闘

東京農業大学院生　松田恭子

Jネット会員の皆さま、はじめまして。東京農業大学で上越市の農産物流通について勉強している松田です。指導教授と旧知の松川さん、和久井さんにも日ごろご指導をいただいており、それがご縁で、十月七日に上越市大潟で行われた「Jネット会員による楽しい農業体験」に飛び入り参加させていただきました。

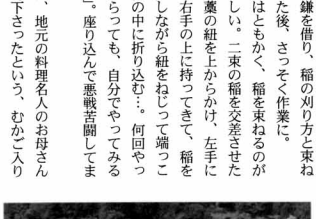
体験場所は桑取川沿いの道を折れてぐんぐん車で上がったところで、意外に平らな土地が広がる、開放感のあるところでした。こういうところで月見をしたらとてもきれいだろうなぁ。

稲刈りをする棚田（一反の半分くらい）は有機、減農薬で栽培されているもので、稲の根元まで色がとてもキレイでした。サイズに合わせて用意してもらった長靴と、軍手、鎌を借り、稲の刈り方と束ね方を教わった後、さっそく作業に。

刈るほうはともかく、稲を束ねるのがとにかく難しい。二束の稲を交差させた形で重ね、藁の紐を上からかけ、左手に持った紐を右手の上に持ってきて、稲をぐるっと回しながら紐をねじって端っこを回した紐の中に折り込む…。何回やってみせてもらっても、自分でやってみると「???」。座り込んで悪戦苦闘してました。

お昼には、地元の料理名人のお母さんが用意して下さったという、むかご入りおむすび、ずいきの酢づけ、漬物、のっぺが並びました。小粒のお米がガッチリ詰まっているモチモチしたおむすびは、塩味がほんのりついていて絶妙な味でした。東京の水分の多いフワフワおむすびとは一味違った、これぞおむすび。

刈り取った後は、いよいよ、はさがけです。稲刈りをしたことはありましたが、はさがけは初めての体験なので、私もはさ木に登ってみました。はさ木にまたがるだけで稲をかけていくのは、結構不安定で動きがとれない。下から稲をうまく投げ渡してくださるので助かりました。こうして無事一枚の田が終了。農家の方、市役所やＮＰＯの方々、本当にお世話になりました。



そして、十月の下旬、お米がうちに届きました。さっそく玄米を炊いてみました。炊飯器で炊いて二日目まで置いても一層モチモチしておいしい（食べ方が邪道でスミマセン）し、おむすびを作って冷めてから食べてもおいしい。

先日、ある講演会で居酒屋チェーンの方が言っておられましたが、外食産業では米を炊いて三時間たってからお客様に出すので、三時間たっても味が劣化しない米はとても価値のあるものだそうです。その意味だけ見ても上越の米は個性的で、まだまだ潜在的なパワーがあるのではないでしょうか。

これからも上越に足を運び、深〜く関わっていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

百年前の高田の商業地図

名古屋市天白区　太田四郎（本町五丁目出身）

今年の三月に何年か振りで高田の小学校の同級会が東京でありましたが、その時明治時代の高田の商売屋の地図が話題になり、是非みたいものだなど話しておりました。

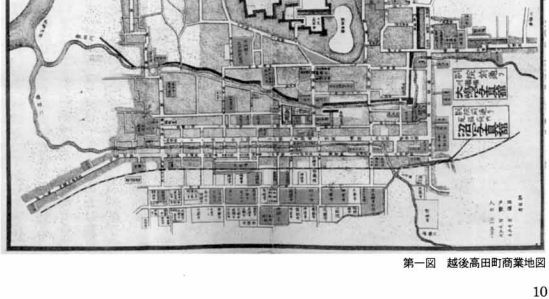
私は昔の高田の町屋に生れ育ったのですが雪国の特徴で冬天窓から採光するために吹き抜け構造の居間があり、上を見ると太い梁が煤でまっ黒になっておりました。今それをみればクラッシックで民芸調かなと思ったかも知れませんが子供心には汚く感じたのでしょう。大正の初め親父がそこで商売を始めましたがその前はそこは「そばや」だったと聞いておりました。

同級会のあと暫くして高田在住の同級生森川洋子さんから明治三十九年（一九〇六年）発行の「越後高田町商業地図」が送られて来ました。七十五センチ角位の大きさで真中に高田全体の地図があり、そのまわりに各町内毎に商売屋がこまかく並べてあり間口の広い家は大きく狭い家は小さく、そして夫々に商売名や屋号姓名が書かれております。その頃の人口は二一、五三〇、戸数四、七九七と記載されており、これからみても相当こまかい地図です。（第一図）

私の生れた処は昔の町名で中小町（現本町五丁目）の三の辻の近くですがそれらしい処にせまい間口ですが「そばや田毎」とありました。明治時代にはわが家の処に「田毎」と云う屋号の「そばや」があったんだと確認することができ、そして天井の梁が黒くなる程火を焚いてそばを茹でたのかなと思うと何だか感無量でした。

またわが家から二～三軒北をみますと「菊水」マークに「日本葡萄酒株式会社」と云う処があります。これは岩の原葡萄園（明治二十三年創業）の葡萄酒販売強化のため販売専業の会社を明治三十六年に設立し本社をここにおいて活動した由です。しかし、明治四十二年この会社が不況のため廃業しましたがそのあとに相川菓子店（会員相川義夫さんの生家）が三の辻の杉の森から移っておられます。（第二図、第三図）

またこの頃下職人町（現大町五丁目）に内藤うるし店（会員内藤実さんの生家）がありますが、その後下小町（現本町六丁目）に移られております。またこの頃の商売を現在も伝統を守られて続け



第一図　越後高田町商業地図

られているお店もありますが、わが家のまわりでもこの頃から大正・昭和にかけて米屋から骨董屋に、またランプ問屋から洋品屋にまた古物商から陶器屋に商売替えしているお店があります。お店の移転や商売替えなどこの頃は元気よく活溌に行われていたのかなと云う気がします。成長期には人の意識も大胆に変革を求め、それがまた成長を促すのかなと思ったりしました。

この細かい地図を虫眼鏡をつかったり乍らじっくりみていますとまた新たなことが判ったりします。

御承知の通り直江津から関山まで鉄道が開通したのが明治十九年（一八八六年）で今から百二十年位前ですがこの工事の施工をした鹿島組（現在の鹿島建設）の社長鹿島岩蔵が越後高田出身の事業家で美術商でもあった三館一郎次に赤倉温泉のよさを教えられ赤倉に妙香山の名にちなんで「香嶽楼」と云う立派な宿屋を建て、明治十九年に開業したのだそうです。

また一説によれば当時の鉄道局長官の井上勝と云う人が鉄道を開通し便利になったので景勝の地赤倉にハイカラな宿屋をつくってみんなに楽しんでもらってはどうかと勧めたとも云われております。以下鹿島建設百三十年史から抜粋しますと『当時の赤倉は湯治客のような宿屋ばかりだったから三方ガラス張りの浴室を持った香嶽楼は不相応なくらいに飛び抜けていた。しかし三館が上野公園で料亭「常盤華壇」を経営していたところからそこの英国人コックを連れて来て西洋料理を供したり、室料と食事代を別計算にするというホテル式の営業をやったらしい。……やがて香嶽楼には西洋人や尾崎紅葉のような文士も折々泊るようになり有名になった。』とあります。

三館一郎次と云う人については前述の通り明治時代にハイカラなことをした高田出身の人がいたのだなと云う認識でしたがこの地図をみていて高田で商売をしていたことを知り何だか親しさを感じました。上職人町（現大町三丁目）の御馬出し近く、現在の裁判所の西側の辺りに「醤油醸造本舗味曽旅館部三館一郎次」と大きな字をみつけました。（第五図）。

この辺りはその後、明治四十一年にお城跡に設置された第十三師団司令部への主要道路として拡幅改修され「司令部通り」と呼ばれた処です。

お堀やお花見や学校へ行くのによく通ったなつかしい道でした。

思いつくまゝに今までみつけたことを書き並べてみましたがまだまだ何かありそうです。

（編集部注・太田会長が古い高田の地図をお持ちと聞いてあまり時間のない中で寄稿をお願いしました。）

第二図　中小町、杉ノ森

第三図　日本葡萄酒株式会社本社

第五図　上職人町

第四図　下職人町

上越の今昔

あの昔の懐かしい風景が、現在どのように変わっているのでしょか。

もう一度見てみたい原風景を写真で紹介するコーナーです。

懐かしい昔を思い出して頂ければ幸いです。

また、皆様の家に懐かしい写真がありましたら、ご連絡ください。

今回の写真は岡村博己さん、JR、上越市、他から提供いただきました。

なお、最近の写真は上越市在住の岩関順雄さんにデジカメで撮影していただきました。

○本町５丁目交差点より高田駅を望む

○高田駅

○直江津駅

○練兵場（中田原）

○高田城址

座談会

「Jネットは何をめざすか」

出席者　内山　貢、岡村博己
　　澤カツ子、内藤　實
　　長谷川千代、松川太賀雄
　　和久井博（司会）

司会　本日はJネットの未来構想と言うか十年先、二十年先のJネットのあり方を考えてみたいと思います。でも最初から未来構想と言っても中々難しいでしょうから、とりあえず、色々な選択肢や考えられるアイテムを皆で並べてみませんか。例えば、これまでの「街づくり」に対する反省から新しい試みが提案されていますよね。しかし、街づくりの主体が相変わらず、行政の側にウェイトが大きいことから、首長が変わることに方針を大きく転換せざるを得ないという問題がありますね。だから、Jネットのような団体が市民と組んで恒久的な街づくりの基幹的な組織になるというのも理想的だと思いますね。それから、通販のような活動で都会と上越を結びつけると言うのも重要だと思います。日本自動車連盟（JAF）はレスキュー業務が主ですが、通販のウェイトが非常に大きくなっているようですから…。

それではまず、Jネットのこれまでの活動の総括と今後についてどなたかいかがですか。

○Jネットはこれまで会員が千人を超えることを目標にしており、「千人になれば何ができるぞ！」ということで七年目を迎えています。中々目標が実現できない中で、もう一つ上越の応援団として、会員が今住んでいる町からの情報を発信する、あるいは上越の街づくりに代表委員を送って色々な意見を述べるなどの活動をして来たということですね。併せて、サロンやふるさと交流会などの親睦活動をメインにして来たわけです。交流会も年一回というこれまでの流れを変えるという意味で、現地集合の「観桜会」「はす祭り」さらに農業体験としての「田植え」や「稲刈り」と活動の範囲を拡げて来たわけです。

ただ、一方で、市の職員や市民の方が、Jネットの活動をどこまで認識し、理解されているかというと非常にブアーな感じがします。そこをターゲットに七年目の新たなバージョンを考える必要があると思います。

○私は先ず、今話しのあった会員の増加対策について話したいと思います。昔は、夜行列車で上京するなど、東京は遠い地でしたが、今は日帰りの距離になったと思います。若い方々は遠くへ来たという感覚が薄らいでいるから同郷会に郷愁を感じないのではないかとも思います。そのことを前提に何か対策がないのかなと思います。

それから、発会当初入会した知人会員がメリットが少ないからと、翌年辞めてしまった例があります。ですから、メリットを明確にすることと、Jネットの会員であることの誇り、名誉を判りやすい形で示す必要があるように思えます。郷土の発展に寄与するという会員意識の向上には、どうしたらよいだろうかと思いますね。例えば、市の広報に時折「Jネットコーナー」を設けてもらえると会員としての貢献が実感として湧くのではないかと思います。また、斡旋品（推奨品）の売れ筋を調べ、例えばベスト3などで「Jネット便り」でお知らせすれば、関心が高まるのではなかろうかと思います。そんなに売れているものなら自分も宅急便で取り寄せて見たいと思うようになり、これもメリットになると感じます。また、生協のようにまとめ買いして、各人へ配達する方法は出来ないだろうか。誰がやるか難しいですが…。

以上ですが、会員数の伸び悩みが毎回運営委の議題になっていますが、見方を変えれば、八〇〇名の会員数はかなり大勢が参加しているようにも思えますよね。

司会　うまく、まとめていただきました。まず、最初の話に関しましては、昔は、中学、高校を卒業して集団就職で上野へやって来た。その方々が大変苦労されて今日の立場を築かれている。そんな中でのふるさと回帰がJネットと良くマッチするわけですが、最近は長男長女社会ですから、上京して東京の大学を卒業しても大半が田舎へ帰ってしまう。即

ち、Jネットの予備群は激減しているという大変な局面が見えて来ますね。

○ですから、今の会員がJネットにとっても上越市にとっても貴重だと言うことですね。

司会　次にメリットという話がありました。Jネットに入ると面白いとか、得をするといったことがあると良いわけですね。それではどんなメリットが考えられるのか議論しましょう。

○Jネットの会員証を見せると市の施設が半額になりますが、中々利用する機会がありませんから大きなメリットにはなっていませんよね。

○メリットと言っても二つあって、一つは直接的な経済的メリットであって、それは、物産を買うと送料が安くなるとか、割引になるということですよね。もう一つはふる里の出来事を知ることが出来ることで自分達がふる里回帰というか心の癒しということでメリットになるということがあるかどうかですね。

○今でも色々メリットがあると思うけれど、会員はあまり活用していないんだよね。サロンにもあまり参加しないし、バスツアーも大変楽しいんでリピータが多いけれども、参加する人が限られていますよね。もっと積極的に活用したら良いと思うね。

○人とのふれ合いで言えば、私はJネットに入ってから色々な人と知りあったし、今でも非常に親しくおつき合いしています。Jネットのような会は、自分から積極的に行動しないとメリットも小さいことになります。ただ、若い人と知り合うことが少ないのは問題ですね。

○高田高校は一、七〇〇人の会員が東京支部に居ますが、これを更に増やそうとすると若い人が対象になり非常に大きなエネルギーが必要ですね。北城高校さんも同じではないですか。

○全く同じですね。ある年代から下になるともう無理ですね。精神的な面でのなつかしさというより自分の生活が精一杯で、生活に追われていて同窓会にまで参加する精神的な余裕がないということですね。

もう一つは、今さら「同窓会、などという時代ではないでしょう。」とはっきりおっしゃるんですね。自分達で仲よしクラブで食事会をした方が楽しいと言うんですね。情緒的な面を求めてもすごくドライになっている年代が増えているので、会員を拡げるのは非常に難しいですね。

○私もそう思いますね。これから重要なのは団塊の世代ですね。これの一角をうまく取り込めば良いわけですよね。でも、どうしたら団塊の世代にスイッチが入るかですよね。

○若者といえば、四〇才以下の人達は仕事が面白くないと直ぐに会社を変わる。欲しいものがあれば、車でもヨットでも海外旅行でも直ぐやる。その行動力はすごいですよね。海外ツアーの客は老人と若者がほとんどと言いますから。

○私は若者の価値観が異なると言っても、短絡的なメリットだけではなく、「人の役に立つ」といったようなものにも価値観は感じていると思いますよ。

○今、色々なことが税金で行われていますが、将来は人口が減少し、当然、税収も少なくなりますね。だから、自分達でやれることはやるようにしないとこれからはダメなんだと思いますが、若い人達はどんな風に思っているのでしょうかね。

○私は、若者にもそういう考え方は現れてくると思いますよ。税金とられるくらいなら自分達でやろうと思うのではないですか。NHKの番組の「お助け隊」を見ていると若者が積極的に参加しているし、若い者も捨てたものじゃないと思いますね。

○今後に希望を持って良いのですかね。

司会　ところで、Jネットの会員には色々な能力を持っている人が大勢います。そういう方の力を利用出来るようにデータベースを整備する必要があると思いますが、この点は如何ですか。

○少しはずれますが、会員で商売をやっている人も多いですが、そういう人を毎月の「たより」で積極的に紹介してはどうだろう。特に地方の会員が出してくれると、地方へ行った際に寄る楽しみが増えますね。是非やりましょう。

○自薦他薦で商売をやっている人は四百字でまとめてもらえば良いですね。毎月「たより」に出しましょう。

○会員の持つ能力をお互いの了解の上で利用し合うということが出来れば良いですね。今後、是非、検討しましょう。

司会　交流会をもっと活性化したいと思いますが、ポイントはどの辺にありますか。

○今までのバスツアーはバス代が高くて、割高になってしまうが、現地集合のお花見では会費三、〇〇〇円で結構楽しめてしまうわけですよね。

○先日の稲刈りも五人で相乗りしましたが、そのようなやり方で、交通費を安くすることがポイントの一つですね。

○池袋から所沢あたりから路線バスが出ていますが、そういうのを団体で利用するのも安く出来る方法じゃないですか。

司会　「おもしろい」「楽しい」ということでは毎月商品を用意して抽選で当った人にあげる等の企画も考えられますよね。

○いいですね。地元の産品を提供してもらっても良いですね。

○毎月の「たより」にキーワードを載せてそれを葉書に書いてもらう方法が良いのでは…。

○たまには高額商品も用意して、次号に当選者の写真と喜びの言葉を載せる等というのも良いですね。かなりのインセンティブになると思うね。

○八百人の会員のうち一五％くらいの人が申し込みをして一二〇人、商品が六点あれば二十分の一だから、当たる確率は高いよ。

○地元の酒屋さんや米屋さんに協力してもらえば、かなり地元産品の宣伝にもなりますね。

司会　地元産品のJネットを通じての普及も大切な機能と思われますがネックは送料ですね。

○送料の総額はどの程度になるのですかね。Jネットで運賃負担するというアイデアもあったと思いますが…。

○そうですね。賛助会員に関しては高い会費をいただいているのだから送料をJネットで負担しても良いですね。

ただ、具体的にはどのように注文するかを考えないといけないですね。先日の食の工房は、Jネットの名簿を渡しておき、それを見て、判断してもらったんですがね。

○いずれは「Jネット推奨マーク」を考えても良いですね。いずれにせよ、そのようなシステムを是非検討しましょう。

司会　先程話のありました市の広報に「Jネットコーナー」を設けてもらう件ですが、これについては如何ですか。

○いいですね。是非、市の方と交渉して、二～三ケ月毎にJネットの活動報告を載せてもらうことにしましょう。

○それなら、賛助会員の「上越タイムス」にもお願いしてはどうかな。上越出身者に関するニュースは、上越市民は興味があると思うし、上越タイムスがそれを取材しようとしても中々困難だから、Jネットが発信してやれば良い。

司会　是非その方向で実現させましょう。次に、Jネットの推奨品の売れ筋ベストテンの公表をお知らせする件ですが、どのように統計データを収集するかが難しそうですね。

○先程のクイズの賞品応募の際に、葉書にアンケートで「上越へ行かれた際に何をお土産で買いますか?」といったようなことを集計して、公表するのが良いね。

○生協のまとめ買いのようなシステムはかなり難しそうですね。

司会　まとめ買い等は今後の検討が必要ですね。その他、何かありますか。

○毎月やっているJネットの中での会話のうち、「これは!」と思われるものをいくつか「たより」に載せるとサロンの雰囲気もわかって良いと思います。

○面白い話が時々あるので、良いアイデアだと思うよ。ところで、一人が二分という時間配分は適当かね。

○現在採用しているタイマーはグッドアイデアですね。

司会　色々な話がありましたが、上越市がJネットに補助金を出してくれている意味は、上越市の応援団としての上越のためになる活動というのがあると思います。この点ではどうでしょうか。

○先程の話にありましたが、Jネット会員は、単身で上京し、苦労して、現在の地位を築いて来た人が多いと思います。だから、色々な専門家がいる。この人達を先程話のあった人材のデータベースに登録して、上越市が困った時には、無料という訳にはいかないが、交通費と

宿泊費くらいでお手伝いするという、そんなシステムを考えたら良いのではないかと思いますね。

○色々な人材がいると思いますね。マイスターと呼ばれるような専門家だけではなく、スポーツのインストラクターや元選手で、その人が指導すれば非常に成績が上るなどということでも期待出来るよね。

○Jネットの中に色々な分化会やチームを作っても良いですね。

○専門家だけではなく色々な趣味を持っている方もいるので、その人達のアイデアも上越に伝えられるといいですね。例えば、上越を「瓢箪の里」にするとか、昔あった「家中梅」をもう一度、各家で作り、焼酎のお湯割専用ブランドの梅干しを作るなどというのはどうかな。

○正善寺は斜面という斜面に「茗荷」が植えてあり、年間一億円以上稼いでいるという例もあるからね。

司会　そろそろ時間ですので、最後に言い忘れたことや、気が付いたことを一人ずつお願いします。

○私が上越へ帰ると友人は「帰って来たのかね。」と言う。私は「東京から帰って来る人はその他の観光客以上に地元の物産を買って帰るのだから、最上の観光客が来たと言うことでもっと大切にすべきだ。」と言うのですが、理解してもらえませんね。以前、「会員の里親制度」を募集したけれどダメだったのはその辺の理由と関係がありそうですね。

○上越市内でお金が廻るシステムにしなければダメだと思う。その中にJネットを組み込めば、経済圏が大きくなる。また例えば、上越で年間百台の車椅子を外部から買っているとしたら、地元の自転車屋や鉄工場にそれを作る技術を育てるプロジェクトを作り、Jネットのメンバーが協力するというようなやり方もあるね。

○今、全国的にパソコンが普及しているけれど、プログラムを組む人は皆無に近いですよね。Jネットが、プログラミングの教育、通信教育でも良いと思うが、小中学あるいは高校生を対象に行い、毎年コンテストを行い、優秀なプログラムには豪華賞品を与える。これをJネットが主催する。賞は市長賞、教育委員長賞、日立賞、松下賞、オリンパス賞、SB賞とスポンサーを集めてくれば良いのだから、費用もそれほどかかからない。

○最近、青山や六本木にプラダやヴィトンの店が相次いで出店し、女性でいっぱいですね。ブランドの強さを感じますね。一本原価八〇〇円のネクタイが一万円～二万円になる訳だから付加価値が大きいね。上越も良いものが沢山あるんだから、ブランドを育てないといけないね。とりあえず、お酒、お米ですね。

○米と酒以外にも上越には観光の材料が豊富にあるよね。しかし、地元では余り活用されていないですね。前島密や上杉謙信、桜や蓮、寺町などはもっと一体的に整備すべきと思います。これはJネットからも提案したいですね。

○少し主旨が異なりますが、総会の会費を女房や子供を半額にして、女性や老人の参加を歓迎する案はどうかね。また、東京での催し物を色々な視点で行いたいですね。ゴルフも良いし、愛犬を対象に「ペット大集合」などというのも面白いのではないかな。

○Jネット会員の鎮西僧侶に講話をお願いするというのも催し物に入れて良いのでは。徐々にお墓の相談なども出るかも知れませんから。（笑）

司会　どうも長時間ありがとうございました。これからのJネットの活動を考える上で大変貴重な意見が沢山出たと思います。これをもとに今後の活動方針を早急に検討したいと思います。

二十一世紀は「大量生産―大量消費」というこれまでのスタイルは消滅し、物を大量に作り出す大企業というのがなくなってくると堺屋太一さんは言っていますね。そして、次に来るのは知価社会であり、多くの人が地縁社会で生活するということになると言っています。

Jネットはまさに地縁社会ですから、二十一世紀末に向けて大きく育てていきたいですね。

（終）

Jネットサロン

東京地区では、毎月第二水曜日の午後五時三十分からJネットサロンを開催しています。ご家族、ご友人お誘いあわせのうえ、お気軽にご参加ください。楽しいひとときを過ごしましょう。

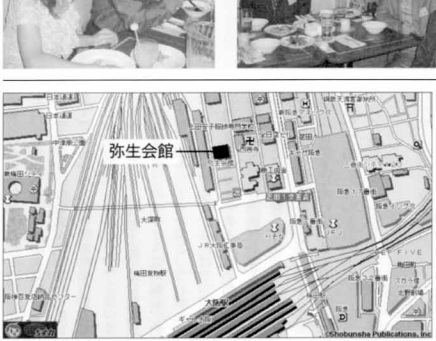
場所は㈱社会システム研究所内のJネット運営委員会事務局です。（JR渋谷駅から歩いて八分）。会費は千円（当日会場にて）です。

○東海地区サロン

平成十五年九月二十日（土）十八時から東海地区サロンが開催されました。場所はJR名古屋駅ツインタワーの十五階名古屋マリオットアソシアホテルのレストラン「パーゴラ」で、参加者は四十二人。大阪から尾崎副会長と塚田さん、上越市からは関川係長が参加されました。

○関西サロン（予定）

来る平成十五年十二月六日（土）正午に関西サロンが開催されます。場所は大阪駅から歩いて五分の「大阪弥生会館」です。住所は大阪市北区芝田二の四の五三、電話〇六（六三七三）一八四一。会費は三、五〇〇円（当日会場にて）です。是非ご参加ください。申込みは本庁事務局まで。



ホームページ紹介

この春ホームページを一新しました。日ごとに閲覧者の数が増えております。

中央に「Jネットニュース」欄を配置し、上越との交流と会員の活動を紹介しております。

また会員の皆様の新しい発見、知って欲しい情報などを紹介する「会員よりの情報」欄も作りました。ここでは会員が関係するイベントやおいしいお店発見などを載せています。

更に、会員のホームページと上越関連のホームページに直ぐ接続できる「上越関連リンク」欄、「賛助会員の紹介」欄などを加え、会員の皆様に楽しんで頂けるように致しました。

会員のコミュニケーションの場としてのホームページに成長するように一層改善するつもりです。

皆さんのお知恵を貸してください。

URL http://www.joetsu.gr.jp/

ふるさと　上越高田市

北海道上磯郡知内町　中村恭子（西城町出身）

墓は東南東に向って立っている。祖父が昭和十年十月に建てたものだ。墓石には年月日と、中村利登之建とのみ刻まれて有る他、物故者の名はない。

金谷山のお墓

何時の頃であったろう。新潟の高田に「盃」を刻んだ祖先の墓がある、と聞いたのは…。

祖父が、この世を旅立ったのは昭和十七年一月三十一日、ぼたん雪が激しく音もなく降っていたのを覚えている。父に抱きかかえられ、西方に向い念仏を称え乍らの往生であった。往年八十八歳、私が七歳の時であった。私への遺言は『恭子、風邪ひくなよ』であった。

中村の家を継ぐ事になり、諸事に気を取られていた私も、五十歳も半ばを越えた頃、祖先の源（ルーツ）が、気になり出した。町役場へ出掛けて、祖父の戸籍を調べ始めた。

高田市は上越市になって居た。後日私は高田へと旅立った。

親戚加藤家の墓が寺町高安寺に在るとの情報から、ＪＲ日本海４号に乗り翌朝直江津に着いた。直江津から乗り換えて二つ目の駅高田に着き、尋ね尋ねて高安寺さんを訪れた。時は確か平成に入った八月の七日であった。過去帳を調べて頂いたが加藤家のは在っても中村家のは無いとの事。私の家の宗旨が浄土真宗である事から、これは尤もな事と思い、辞して今度は上越市役所を訪れた。が、此処でも明治三年以前の記録は無いとの事。結局お寺の過去帳に祖先の足跡を辿るしか方法は無い。但し、私の家の菩提寺が分らない。浄土真宗のお寺を調べてもらい、浄興寺さんに伺うが此処にも祖先の名はなかった。

榊神社にて

とつかうして第一回目の上越高田への旅は終わる。その後、高安寺様の紹介で、旧榊原藩和親会の存在を知る事になり、榊神社や金谷山の墓地を知る事になる。この間、和親会の関谷清治様のご尽力は忘れられない。

四季の豊かな上越は心のふるさと

仙台市青葉区　植村千枝（西城町出身）

関山あたりから残雪に覆われていた沿線の風景は一変、記憶の底にある雪解け頃の黒土が表われ、芽吹いたばかりの若葉が光る。一路「高田」駅へ。今から九年余り前の一九九四年（平成六年）四月十四日のことである。この日は附属小学校昭和十五年卒のクラス会で、何十年ぶりかの上越市である。地元在住の友の企画は的を射て、お城の桜は満開！！恩師を囲み、関西、東京方面、そして東北と全国に散らばった約三十名余りの同級生との再会を喜びあった。夜桜見物もし、五智の海の家で一泊。

それから六年後二〇〇〇年（平成十二年）十月十五日恩師の墓参も兼ねたクラス会に、再び上越を訪れた。宿は紅葉が美しい妙高簡保の宿。

私が旧高田市に住んだのは、公務員の父の任期中で、小学校四年から高等女学校一年の四年間（一九三八年～一九四一年）のわずかな時期である。だが、思春期に当り、上越の四季の豊かな風土に育まれ、感性を磨かれたように思う。今年の妙高の初冠雪は九月三十日とか。当時も秋になると妙高を仰ぎ、三度白くなると街にも雪が降る・・・と待ちこがれた。庭木の冬囲い、食糧保存のため沢山の漬物作り、雪下ろし、カンジキで雪道をつける親達の苦労を尻目に、暗くなるまでスキーに興じた子ども時代、今も原風景として甦る。

Jネット会長、太田四郎氏とは光栄にも小学校の同級生である。名古屋に在住され、ご多忙の中を郷土のため尽力されておられるご様子を、クラス会の度に伺い、遅まきながら今年度から入れていただいた。会報、広報等を企画課から送っていただき、情報を通してぐんと近くなった気分である。市民本位の細やかな行政の姿が、随所に読み取れるのもうれしい。

低成長、人口減に将来を案じる方も多いが、二十一世紀は、開発からまぬがれた豊かな自然を再認識し、次代に伝えることを考えたい。そのため行政は循環型まちづくりを、市民と一体となって実現する方策に取り組んでほしい。

長く教育に関わってきた私の知り得た範囲だが、将来を担う上越の子どもたちに期待がもてるのである。たとえば大手町小学校の農業を中心にした総合学習、附属小学校の子ども主体の実践研究など、全国的に注目を集めてきている。有能な現場教師の再教育を主体とする上越教育大学も、独立法人化を機に更に地域教育に門戸を開き、貢献してほしいと願っている。

蓮の薫る朝の思い出

埼玉県和光市　内山哲也（埼玉県上尾市出身）
内山恵子（下中田出身）

夏の朝、匂い立つような蓮の薫りで目覚める。それが私の上越の思い出です。

平成四年八月、自衛官である私は仕事の都合で神奈川県横須賀市から高田に赴任致しました。私が住むことになった官舎は、高田公園に隣接しており窓からはお城の堀が見渡せ、堀には一面に蓮の花が咲き誇っておりました。それを目にした途端、見知らぬ地に赴任した不安は吹き飛びました。また、お堀越し遙かに望む妙高山の雄姿は私に勇気を与えてくれ、新たな勤務地「高田」での希望に胸がふくらんだ事を記憶しております。

新南町公園でスクスク育つ桜の木

私の出身地は埼玉県の上尾市です。上尾市に住んでいた頃の上越市の印象は、幼い頃、家族旅行に出かける時によく乗せてもらった早朝の列車、当時は電気機関車に引かれた客車仕立ての列車で、その行き先が「直江津行き」だったと記憶しています。「直江津」ってどんな所かなぁと地図を広げて「その先は海なんだ」と海のない県で生まれ育った私は憧れとして思い描いておりました。

あれから二十数年後、仕事で赴任することは夢にも思いませんでした。きっと、あの頃から私と「高田」は運命の糸で結ばれていたのでしょう。

高田での楽しかった生活も約二年間で終わりを迎えてしまいました。自衛隊には定期異動というものがあり、二年から三年で別な部隊に転勤しなければなりません。その後、現在の埼玉県和光市に移り住み、関東近辺を転勤しながら勤務しております。今では結婚して三人の男の子の父親となりましたが、妻は新潟出身で小学校低学年の頃に父親の仕事の関係で高田に住んでいたことがありました。結婚により私と高田との縁が再び繋がりました。

それ以来、毎年蓮の花の頃には家族で高田を訪れております。今年は、八月中旬に家族皆でオーナーとなった桜の木への対面とお城の蓮の花を見に高田の地を訪れました。

左から耕佑、実征、拓郎の三兄弟

新南町公園でスクスクと育っている桜の木を発見したとても嬉しく思いましたが、お城の蓮の花は、昨年に比べるとやや少なく残念に思いました。また、金谷山では眼下に広がる高田平野を眺めたり子供達とスーパーボブスレーを楽しんだり、今年も我が家のアルバムに上越の思い出が刻まれました。

いつの日か、再び上越で暮らす日を夢見ながら、これからも家族皆で上越の思い出を刻んでいきたいと思います。

お堀越し遙かに望む妙高山

闘病記

さいたま市見沼区　安藤三郎（東本町三丁目出身）

計算業務の迅速化を目指して電算機の勉強を始めたのが昭和四十年暮、直訳的な説明書があるだけであれこれ悩むうちにその為か、胃が変になり吐気の連続となった。両親の法要で帰省の帰り義兄の所で精密検査を受け胃潰瘍と診断され、即刻入院となった。所が病室が満員だった。すると精神科医の義兄が俺の所の特室があると云う。その病棟は入る時は自由だが出る時は責任者の解錠が必要で、病室はドアが廊下側への外開き、窓は鉄の縦格子であった。

入院一日目は寝具を整えに来た女の子にどこが悪いかと聞かれたから、胃潰瘍と答えると「ヤッパリ」と云うような顔をされた。二日目は掃除の小母さんが入って来るなり「そんなに思いつめてると余計悪くなる」と云う。三日目はこの小母さんに「昨日は失礼しました」と頭を下げられた。小母さんはこの人もヤッパリ障害を自覚していないと思ったから、二日目の一件のあと状況をナースセンターに報告して、事情を知らされたのである。

ここでは胃潰瘍は通用しないからと気付き積極的に融け込んだ方が肩も凝らぬと諦め、皆が集まるTV、麻雀などのあるホールへ出掛けた。時々洗濯したガーゼなどを畳む作業があった。やり方を教えて貰いやって居ると患者のオーさんが違うと云い手本を見せてくれた。所が全く同じだったが逆らわず作業を続けて居たら、「安藤さんは紙一重だ」と褒められた。やがて私はそこの患者でないらしいと一部の人に判ったらしい。理由は診察に見える医師と持参する注射などは、今迄この病棟では見た事がないという。良く観察していると敬服した。

私の病状はひたすら眠り十日程で便の色が黒から黄に変りそれにつれて食欲も回復して来た。手術なら同じ太さとなる食道と十二指腸を縫合する胃の全摘出だったとの事だが、三週間程で退院となった。皆に挨拶したらおかしくなったら又おいでと云われ、六ヶ月後の検診の時は又悪くなったかと歓迎された。逆境にある時気取らず流れに委せると意外に楽になる事を教えられた体験でもあった。

妙高山はスメール山の意訳

世田谷区　鎮西　昶（木田出身）

古代仏教の宇宙観に、宇宙の中心にはスメール山（せん）と言う高い山がそびえ立ち、日月はこの山を中心にして廻っていると説いている。その高さは八万由旬と言われる。ちなみに一由旬が約十三キロメートルとすると百万キロメートルにもなる。

梵音Ｓｕｍｅｒｕ山の音写で須彌山（しゅみせん）の漢字が当てはめられた。須彌山は七山七海これを環り、山の頂上には仏教と仏教徒を護る善神・帝釈天が住む。中腹には四天王、即ち東方には持国天、南方には増長天、西方には広目天、北方には多聞天が帝釈天に仕え護っている。そのスメール山（須彌山）の意訳が妙高山（又は妙光山ともある）である。

因みに、『妙高』の「妙」の字の成り立ちを漢和辞典で調べてみると、〈女性〉と〈おさない〉から成り立ち、年若い女性の美しさを表わしていて「不思議なまでに美しく優れているさま」とある。

また「高」は、高い楼閣の形を形どった象形文字であるが、高い、ひいては「そびえている」と記述されている。

話は少々逸れるが、須彌山よりも私の耳には須彌檀という言葉が馴染んでいる。お寺の本堂で仏さま（ご本尊）を安置してある檀のことで、須彌山を形どっている。

ところで、我が越後の妙高山は講談社現代新書『須弥山と極楽』に「妙高山は地名辞典によれば、古い呼称のなか山からきている。なか山を名香山と書いた段階をへて、これを音よみにして妙高山と書きかえられた」とある。仏教の日本への伝来が西暦五三八年である事から「名香山」から仏教の言葉に原点のある仏さまの住まれる世界の中心の山「妙高山」と書きかえられたのは、おそらく六世紀～七世紀頃であろうと思われる。

妙高山は単に越後の美しく高い山ではなく、古来より神仏の住まれる信仰の山として崇められた聖山であり、その根底にスメール山（須彌山）の仏語が意識されたに相違ない。

妙高の名前がこのような歴史的意味を持つことを知り「千古の白雪天をつく」妙高山に改めて敬虔なる気持を抱くのである。

合掌

「解説」須弥山

多摩市　和久井博（幸町出身）

先日、Ｊネットの名古屋サロンで太田会長から「妙高山」という名前は大変大きな名前で、仏教の世界観を表わした空想上の山「須弥山（しゅみせん）」からとったものだと教わりました。そこで、仏教に関係することなら鎮西さんにお願いするのが一番と、翌日電話で原稿のお願いをした次第です。

しかし、仏教の専門用語が多く出てきて、素人にはわかりにくいので、インターネットで調べながらわかりやすい解説を試みました。

お釈迦様の教えにある宇宙の考え方のひとつが図に描いた須弥山の図です。三枚の円盤上に高さが百万キロメートルの須弥山が乗っています。円盤の直径は百億キロメートルですからほぼ太陽系くらいです。これがひとつの世界で「小世界」といい、これが千個で「小千世界」、小千世界が千個で「中千世界」、中千世界が千個で「大千世界」です。

キロ、メガ、ギガ、テラとコンピュータの世界と同じ単位系ですね。

大仏さんが管理するのは「三千大千世界」ですからとにかく大きいですね。三テラ小世界ということになります。

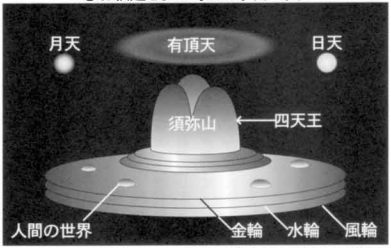
お釈迦様はこの中の小世界の人々を導くために現れた仏様だそうです。

円盤の真ん中にある山が須弥山ですが、鎮西さんが説明されているように梵語ではスメールセンです。これを西遊記で知られる玄奘三蔵法師が妙高山と訳したとあります。

一番上の円盤は金輪といいますが、その際（きわ）までということで金輪際という言葉が使われます。世界の果てまでということで「どんなことがあっても」という意味で使われています。また、須弥山の中腹に四天王がいます。四天王は神様ですから神様が仏教を守っていることになりますね。

また、須弥山の模型が博物館のホームページに出ていました。須弥山儀といいます。地球儀ならぬ宇宙儀ですね。ゼンマイ仕掛けで動くようです。

●お釈迦さまの考えた宇宙の図



直径：１２億３４５０由旬≒１３５億ｋｍ

●須弥山儀

地球儀ならぬ宇宙儀ですね。動くようです。

谷浜の想い出

東京都北区
岩倉茂里
岩倉廣子（東本町五丁目出身）

毎回Ｊネット会員の「お元気ですか？」の記事を楽しく拝読させていただき、それぞれの故郷の想い出に、私を重ねながら七十年も昔の谷浜を回想しています。

特に八月に送られた「広報　じょうえつ　Ｎｏ．７２１」の表紙に飾られた写真はまさしく谷浜海岸であり、加齢とともに薄れる記憶を辿りながらお便りしました。

私の亡父が谷浜出身であったり、家内が高田高女を出て戦後結婚するまで高田に住んでいましたので「Ｊネット会員」になって毎月のふるさと便りを心待ちにしています。

私が昭和九年ごろの夏休みに、はじめて弟と二人で伯父の家に泊まりながら三週間近く谷浜で過ごし、都会では味わえぬ海と山のひろびろした自然のなかで、親元を離れて過ごした忘れることの出来ないふるさとです。

綺麗な海の波打ち際に立ったとき、海の浜茶屋もない、もちろん写っているテトラポットなど無く、大きな日本海が、ただだっ広い殺風景な風景を、少しもの足らない感じがしましたが二～三日するとスッカリ海の子に変身して朝飯を終えるとすぐに浜にでかけ、昼飯まで炎天下の浜辺で飽きずに弟と遊ぶ日課でした。

伯父の家にも同年輩のぐらいの従兄弟がいて、あそび仲間にはことかきません。いつのまにか地元の子供たちと同じ様に、もぎたてのキュウリに味噌をつけてかじり、蒸かしたおやつのジャガイモに塩をつけて食べることも覚えました。

伯父さんは私ら子供にやさしく、三食の食事も伯父さんが賄っていました。あとで判ったことですが伯父さんは海軍に徴兵されてそこで厨房の仕事に従事して、料理に詳しく、とくにカレーはうちのカレーとは違ってルーも、薄かったが味は美味しかった。最近「海軍カレー」の味わえるお店もあるようですが一度食べくらべてみたいと思います。

唯一の交通は北陸線の谷浜駅が伯父さんの家の前にあると言うか、伯父の敷地に北陸線が通っていたので、伯父は運送店を経営していました。屋号は小と描きヤマトと呼んでいました。いまのくろねこヤマトのはしりだったかもしれませんが現在はしもた屋になり孫がすんでいます。

谷浜駅は当時のローカル線の典型的な駅舎で駅前ひろばに大きな柳の木が一本あり、その下に夏場だけの小さな売店があり、カキ氷やお菓子を売っていました。上りや下り列車の、安全運転のサイレンの音が二階の部屋から手に取るように聞こえてきます。日本海の水平線に沈む真っ赤な夕日は、一ヶ月滞在しても滅多に見られぬ素晴らしい夕焼けで、いまでも脳裏にシッカリ焼き付いています。

浜の混雑する時は日曜日のみで、現在のようなクルマがないのでローカル線の鈍行列車が高田、長野の海水浴客を乗せてきますが、当時は浜茶屋もなく、ビーチパラソルもなく、肌の白い海水浴客で浜が賑わっていました。それも直江津海岸、郷津海岸（虫生海岸）は料理や眺めの好い宿泊施設（前崎館？）があったので海水浴客の一部はそちらに流れていたようです。

ひと駅遠くても遠浅で、砂浜の広い谷浜は隠れた海水浴場でしたので私らは伯父さんの好意に甘え四年のあいだ、連続して毎年の夏休みを谷浜海岸で過ごし、ひとつき遅れのお盆のお墓参りをすませ、土用波で海が荒れてくるころ東京へ真っ黒になって戻るのでした。伯父の運送店の手伝いに、法被を着て駅舎に出入り出来たのも珍しい体験でしたし、荷物の配達で、有間川の奥の正善寺、横山、桑取へも何回か自転車で配達した経験があります。現在「桑取湯ったり村」の立派な施設になっているのを見て驚きました。

お盆になると駅前の火の見櫓のあかりの下で村の盆踊りの催しも懐かしく思います。家内の実家、親戚が健在でいますので第二のふるさととして東京から望郷の想いを綴らせてもらいました。

茶を科学する

川崎市麻生区　坪木良雄（高士村飯田出身）

子供の頃、道路や畑の垣根に白い花をつけるお茶が植えられており、秋には栃の実を小さくしたような実をつける光景があちこちで見られましたが、最近はどうなっているのでしょうか。

私達が日頃、何げなく飲んでいる茶は椿の仲間で日本では秋田県あたりが北限とされていますが、本来、温暖な地域を好み有機物を多く含む排水良好な傾斜地や大きな川の川べりまたは山あいの霧のよくかかるような立地条件が有名な産地を形成し栽培されています。私達が利用しているのは茶の新芽を摘んで加工し、緑茶（グリーンティ）として飲んでいますが、何故かこの緑茶を「お茶」といっています。本来ならば、「茶」でよいのではないかと思います。同じような飲料でも紅茶（ブラックティ）、ウーロン茶、ココア、コーヒーなどは「お」をつけていません。それは推定ですが、日本の茶道からくる敬語的な意味合いからか、または「茶」そのものでは語呂が悪いから「お茶」と呼んでいるのかも知れません。

いずれにしても嗜好的飲料としての茶はカフィン、タンニンなどアルカロイド物質を含み、気付薬や興奮剤であると共にビタミン類を多く含む保健飲料としても古くから利用されています。しかし、何といっても茶は香りと味が尊重されています。特に香りの成分中の花のような香りはリナロール、ゲラニオール、ジャスモンが主で、青のりのような香りはジメチルスルフィドなどの複合香が茶本来のよい香りです。また味については旨味がアミノ酸（テアニン）、甘味が糖、苦味はカフィン、渋味はタンニン（カテキン）です。特に旨味の成分のテアニンの含量が茶の良否を決定し、玉露、てん茶（抹茶）などには最も多く含まれ、次いでアスパラギン酸、グルタミン酸、アルギニンなどのアミノ酸が含まれています。玉露などは生育期の新葉を遮光（被覆）することによってタンニンが減り渋味が少なくなると同時にテアニンが多くなって旨味が増します。

この傾向は窒素肥料を多く施し茶の新芽に窒素成分が多くなればなるほどテアニンが多くなり、より旨味が増します。しかし、米のような穀物を目的とするような作物とは全く逆で利用する部分、種類によって味が如実に変りますのでなかなかうまくいかないものです。

米の話をすればＷＴＯで米の関税引下げが問題になっています。現在四〇〇％の関税を二〇〇％に下げざるを得ないのは、世界中へトヨタの車を輸出している日本としては仕方のないことかも知れません。そうすると、上越の米作農家の半分は米作では生活出来なくなります。

お茶が改良され、お茶の「こしひかり」が上越の田畑を埋め、新たな産業が興隆するのもあながち夢ではないかも知れません。

子供時代の高田の風景

横浜市港北区　小川　弘（本町三丁目出身）

幼子の高田の町は空白あり
半分灼けし写真のように

兵隊が膝高く上げ行進す
雁木の内より旗振り送りし

物心を覚えたのは戦争中の昭和の十七年頃で三歳の頃だろう。家は借家で本町三丁目の西側であった。左隣に長澤病院という内科の病院があり、右の方には数軒おいて木造の高田信用金庫があった。通りの向こう側の右手には洋風木造の市役所があり、入口のすぐ右側に歳を取った代書人が座っていた。

市役所の前庭にそれぞれ縦横一・五メートル程の大きさの立て看板にチャーチルとルーズベルトの似顔絵が画いてあり歩道に向いていた。その前に小石を入れた木箱があり、通る小学生達が石を似顔絵に投げつけていた。高田には歩兵百三十連隊があり、戦地に動員される兵隊を皆で見送ったのであった。

故郷の山に向かへば浮かびくる
それを詠ひし夭折の歌人

南葉山醜女のごとく思いしが
久しく見ざればふくよかになる

子供の頃眺めた景色は記憶の何処かに刷り込みがあるのか、いつ見ても心が落ち着く。特徴のある妙高山とか米山を見れば、高田に帰ってきたという思いがする。南葉山は子供の頃から身近に眺めている山で、メリハリのないぼてーとした塊があるだけで特徴が今一つない。小学生の頃、写生に南葉山を描いた事があったが、緑の山がぶっきらぼうにあるだけで、構図も悪く、情けない絵になったことを今でも覚えている。しかし、還暦を過ぎた今、高田に戻るとこの変哲もない南葉山が懐かしく奥深く見えるから不思議なものだ。

青き海潮のにほひに興奮す
初めて浴びる直江津の海

味気なきテトラポッドを積み重ね
姿変わりし直江津の浜

三歳の夏、父に連れられて高田から直江津まで汽車に乗り初めて海水浴に行った。直江津の町を抜け、岡を登り切ると青い海が見え、潮の香りが強く匂った。初めて海に入り、波に転がされて海水を飲んだ。塩辛く、咳き込んで泣いた。当時の海浜は広く、浜茶屋から海までも相当広かった。灼けた砂の上を走るのが大変だった。

高校生になっても直江津には泳ぎに行った。当時の直江津の港ははしけ艀が着く岸壁があるだけで、小さな貨物船も沖に停泊して艀取りをしていた。関川が海に注ぐ所は、川の左側に鉄筋があら露わになったコンクリート・ブロックの堤防が七十メートル程海に突き出ており、そこでは雑魚やワタリガニを釣る人達が並んでいた。夏は静かな、のんびりした海だった。

岩の原葡萄園

愛知県半田市　山崎京子（高津出身）

先日、探し物をしていたところ、懐かしい写真が出てきました。兄と二人で農作業の支度をしてこれから稲刈りに行くところです。

私の家は稲作農家でかなり沢山の田畑がありましたが、父が交通事故で農作業が出来なくなった為、子供の手も欲しい状況でした。

学校から帰ると田んぼに向かい、夜は納屋で脱穀作業の手伝いをしていたあの頃…。小学生の私にはかなり辛い作業でした。でも、今はとても懐かしい思い出です。（あの頃のおかげで、何事があってもへこたれない今の私があるのかもしれません）

私の父が手伝いをしたご褒美に、よく連れて行ってくれたところが、岩の原葡萄園でした。その当時はぶどう狩りが楽しみで、甘酸っぱいぶどうを頬張りながら園内を走り回っていたものです。

今は実家に帰ったときには、必ず立ち寄っておみやげにワインを買って帰るのが楽しみの一つになっています。

故郷から遠く離れたこの地に居ても、Jネットの会を通して色々な出会いや情報を得る事ができて、とても心強い気がします。

これからもJネットを楽しみにしていますので、今後とも宜しくお願いいたします。

ご主人（左）と名古屋サロンでのスナップ

私にとってのふるさと

奈良県大和郡山市　仲村菊江（三和村出身）

妙高、焼山、頸城野の山々と一面の緑豊かな田園風景。「ふるさと」を離れて三十数年経った今でもあの山、道、川は・・・と、懐かしく思い出されます。

つい先頃まで放映されていた朝の連続テレビ小説「こころ」の舞台となった「魚沼の里」に見る風景・方言に郷愁を覚え「ふるさと」への想いを一層深く感じたところでした。

遠く離れてこそ、その素晴らしさを再認識し、そして懐かしさと同時に大切に想えた「ふるさと」は、私にとって何物にも替え難い「心の宝物」です。

さて、私事ですが高校卒業後一年間の東京暮らしの後、子どもの頃からの夢であった栄養士を目指し、はるばる叔母のいる奈良で二年間を過ごしました。そして念願の栄養士として大和郡山市に三十年余勤めることが出来ましたが、昨年止むなき事情で退職いたしました。

そこで現在は、以前仕事の傍ら二十年余趣味として習っていた民謡を、回りの人達の勧めもあり、会を設立し、会員と共に各種コンクールに挑戦しながら頑張っているところです。

振り返ってみると、新潟で生まれ、育った辛抱強さと根気の良さが後押ししてくれたように思います。

民謡にはそれぞれがもつふるさとの心や温もりがあります。それをいっぱい感じながら今後も唄って行きたいと思っています。

おわりに、ふるさとを身近に感じたくてJ-ネット会員になって数年経ちますが、まだ一度も皆さんの企画に参加しておりません。ぜひ一度、機会を作って参加させていただきたいと思います。末永く続けて下さいますようご期待申し上げます。

Jネットの今年の活動

○観桜会

四月十一日（土）に花見会場へ二十六人がそれぞれ直接集合。上越市の職員の方が朝早くから場所を確保してくれ、木浦市長をはじめ、上越の方も一緒になって満開のお花見を楽しみました。その後、市のバスで「湯ったり村」へ行き宿泊、翌日は残雪の中に群生して咲く片栗の花を楽しみました。

○Jネット理事会・総会

五月二十四日（土）市ケ谷の私学会館（アルカディア市ケ谷）で理事会・総会が開かれました。総会には八十一人の会員が出席し、上越出身の丸山おさむさんの声帯模写や上越の味を楽しみました。

○農業体験／田植え

五月二七日（火）～二十八日（水）湯ったり村へ宿泊し、棚田で田植えを行いました。山の水は冷たく、きれいで、そのまま飲めるような水でした。その後、わらびやふきを採り、沢山のおみやげを手に帰京しました。

○会報（十五号）の発行

七月十五日発行。

○名古屋サロン

九月二十日（土）に名古屋駅ビルにあるホテルアソシアのレストランで開催されました。四十二人の方が参加され、楽しい時間を過ごしました。バイキング形式で飲み放題食べ放題で満足でした。

○農業体験／稲刈り

十月六日（月）～十月七日（火）に九人が参加し、湯ったり村へ宿泊して稲刈りをしました。稲刈りの後は栗林で栗拾いをし、大量の栗をお土産に持って帰りました。今年は米の出来が良くないとのことでしたが、Jネットの植えた棚田の稲は最高の出来でした。天日干しのおいしいお米が月末に届きました。

人数に限りがありますが、来年はあなたも是非参加されませんか。

◆今後の予定

・会報（十六号）の発行

十一月末にお届けする予定です。

・二〇〇四年カレンダー

Jネットのオリジナルカレンダーをお届けします。

・大阪サロン開催

平成十五年十二月六日（土）正午から大阪弥生会館（大阪駅から歩いて五分）でサロンが開催されます。会費は三、五〇〇円（当日会場にて）です。参加希望者は本庁事務局まで。

・理事会・文化講演会

一月二十四日（土）に理事会及び文化講演会が開催されます。詳しくは「たより」をご覧ください。

ふるさとのニュース

◆謙信公大橋

五月三十一日に春日地区と上越インター周辺地区を結ぶ関川をまたぐ「謙信公大橋」が開通しました。橋長は二四一メートルです。橋詰には休憩スペースがあり、春日山を一望できます。

◆SL日本海号

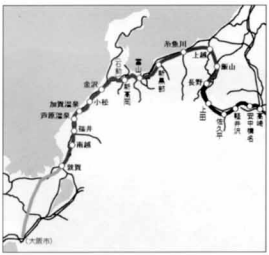
十月十四日の鉄道の日を記念して、蒸気機関車「日本海号」が長岡・直江津間を往復運行しました。直江津では二万二千人を越える人が見学に訪れました。

◆桑取川のサケ

十月中旬、色づき始めた秋景の桑取川にサケの遡上が見られるようになりました。サケ漁は十一月中旬にピークを迎え、十二月まで続きます。

◆北陸新幹線

平成十三年に着工し、二十五年開業を目指すフル規格北陸新幹線は着々と進んでおります。昨年十月に鍬入れをした高田トンネル（尚橋―義明間二千七百五十メートル）は十八年の完成を目指します。



金谷山さくら千本の会

多摩市　和久井博（幸町出身）

昨年、高田高校の同級生有志が中心になって、「金谷山さくら千本の会」が設立されました。荒廃しつつある金谷山に自然とマッチした山桜を植え、魅力ある里山に蘇らせようというものです。当面は向山の二・五ヘクタールの雑木林を対象に活動しています。会の設立趣意書に書かれた活動は左記のとおりです。

一、金谷山の森を健全に育成する活動
二、金谷山の「さくら」を植え、育てる活動
三、森林環境の学習の場を整備する活動
四、豊かな里山の育成に関する情報の受発信活動
五、「さくら」を媒介とした会員相互の親睦活動等

活動は毎月第二日曜日です。昨年、山桜十本を植えたのに続き、今年は山桜五十本、ぶな十本、めくすりの木三本を植樹しました。

年会費は一、〇〇〇円で、苗木の購入は会員からの寄付等でまかなっています。

現在会員は一七〇名、会長は、新潟県で唯一人の樹木医の相沢紀さんです。入会希望者は電話〇二五（五一三）七〇七二（石黒康嗣）へどうぞ。

蛇足ながら、私も会員です。

ふるさとの
美味しいお米を食卓へ

上越産
こしひかり

JAえちご上越 あぐりフーズ 農産加工課

〒942-0061 新潟県上越市春日新田5-3-11
フリーダイヤル 0120-81-1093 ファクシミリ 0120-17-1093

会の運営に
ご協力いただいている
特別賛助会員です。

★特別賛助会員とＪネットはお互いに協力しながら良い街づくりをめざします。

★Ｊネットでは会の運営に協力していただける特別賛助会員を募集しております。

★皆様のご存知の企業・団体等で賛助会員をお願いできるようなところがありましたら是非ご紹介ください。

あの頃に帰る…
風も、匂いも懐かしい
山里の原風景
日本の本当の田舎がここにある

ブナの森に抱かれた、静寂の温泉・宿泊エリア
くみどり湯ったり村
上越市皆口1601
tel. 025-541-2611 fax. 025-541-2616

笹寿司
押し寿司
上越産コシヒカリ
100%「鬼みっ子」
■無農薬・無化学肥料栽培米
■減農薬・無化学肥料栽培米
■減農薬・減化学肥料栽培米
■慣行栽培米
■無農薬・無化学肥料栽培
紫米(もち米)
■減農薬・無化学肥料栽培
こがねもち(もち米)
■減農薬・無化学肥料栽培
低タンパク米(香隠)
豆もち・豆もち
シソもち・大福
うぐいすもち
柿もち(紫黒米)
笹もち・笹だんご
あんころもち
焼もちおやき
紫おこわ・玉目おこわ
はすおこわ・赤飯
山菜おこわ

ふるさとの心、ぬくもり。
いっぺごと味わってくんない。

みょうがシソ酢漬け
みょうが粕漬け
みょうが佃煮
きゅらぶき・ふき醤子
たくあん
(粕漬け・粕漬け・酢漬け)
梅干し
キムチ
(イカキムチ・白菜キムチ)
山菜
(菊・ぜんまい・ウド・こごみ
たらの芽・ふきのとう・あぜみ)
自然芋・菜・いちぢく
かぼちゃ
なまずかぼちゃ
さわし柿・干し柿
ずいき・かれぴょう
こんにゃく
その野菜などなど
ブルーベリー
アイスクリーム
(ブルーベリー・紫えごまいちぢく)
あぜみち醤油
(上越産大豆100%)

特産品と体験工房施設 正善寺工房
NPO法人食の工房ネットワーク
上越市下正善寺1027番地2
かけてくんないや。待ってんでね。
TEL・FAX 025-523-0621

創業明治23年
伝統の味
岩の原ワイン

～日本の本格的ワイン発祥の地～
株式会社 岩の原葡萄園

TEL.025-528-4002 新潟県上越市北方1223番地
URL http://www.iwanohara.sgn.ne.jp/

日本の本格的ワイン発祥の地『岩の原葡萄園』は、明治23年の創業以来、3世紀にわたって高品質のワインを世に送り出してまいりました。
お盛夏で上越市の代表的な特産品として、多くの方にご愛飲いただいております。
さて、弊社では、遠方でお住まいでお近くに岩の原ワイン取扱店がない方に向けて、『岩の原ワイン みゆき会』の会員を募集いたしております。
ワイン1万円(税別)以上のご注文で送料無料、ご入会プレゼントや、お買上げのポイントによるプレゼントなど、色々と特典がございますので、Jネット会員の皆様も是非ご利用下さい。
お問合せ 株式会社岩の原葡萄園 025－528－4002

毎日、発行しています。

今年度中に上越地域での
購読率20%を達成します!

一九〇〇〇部
(※発行部数 H15年10月現在)

地域の元気を刺激する
日刊 上越タイムス
購読料 2,575円(郵送料込)
お申込み…
0120-17-4243
times@joetsu.ne.jp

上越タイムスの本… ●『じょうえつ野の花』 ひっそりと咲き、やさしく語りかける折々の花たち160点収録 筑波遥画集・文 小林金太郎 ¥2,700(税・送料別) ●『上越の史跡と人物』 上越地方の22市町村の史跡と人物を解りやすく解説した一冊 花ケ崎盛明 ¥1,900(税・送料別)

上越を読む

月刊 JACK LAND
上越エリア情報誌 ジャックランド

TEL 025-524-4275 FAX 025-524-4451

環境との調和で新たな価値を
FUKUDA CORPORATION

株式会社 福田組

代表取締役副社長
営業本部長 田村春男

東京本社
〒162-8411 東京都新宿区市谷本村町3-26
TEL 03-3269-4711 FAX 03-5261-5387

○上越の催し物

ふるさとの行事に、参加しませんか。

■レルヒ祭(2月上旬)

平成16年1月31日～2月8日までがレルヒ週間でこの間色々の催しが計画されています。
2月7日(土)に前夜祭、8日(日)は金谷山で各種イベントが計画されています。

○屋台村in本町　○冬の味覚を味わう会　○たいまつ滑降　○どんど焼き
○花火大会　○屋台出店　○一本杖スキー　○モーグル大会

■観桜会（4月中旬）

○今年も現地集合でJネットのお花見をやりましょう。

■上越祭り・祇園際（7月下旬）

○花火大会　○大民謡流し　○御輿の川下り　○お餞米奉納

■義の塩作り（7月下旬）

○子供参加の塩作り大会

■はす祭り（8月上旬）

○蓮の花鑑賞会

■謙信公祭（8月中旬）

○義の塩献上　○出陣行列　○武帝式　○大民謡輪おどり